HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スピリチュアリティ・ブームの光と陰
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	日本脱カルト協会会報, 7-21
Issue Date	2007
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35572
Type	journal article
File Information	sakurai-10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スピリチュアリティ・ブームの光と陰

北海道大学　　櫻井義秀

目次

１　スピリチュアリティへのまなざし
[宗教・医療・教育におけるスピリチュアリティ]
[大衆文化のスピリチュアリティ]
[現代のスピリチュアリティ研究]

２　スピリチュアリティ・ブームと下流化
[スピリチュアリティ・ブームへの警鐘]
[スピリチュアル番組と下流化]
[若者とスピリチュアリティ]
[スピリチュアリティ・ブームの仕掛け]

３　「すぴこん」にみるスピリチュアリティ
[すぴこんとは何か]
[スピリチュアリティの市場]
[すぴこんブームの解釈]

４　スピリチュアリティ・ブームの危うさ
[自己実現の内省化とスピリチュアルな個人主義へ]
[スピリチュアリティとは中抜きの思考？]

１　スピリチュアリティへのまなざし

[宗教・医療・教育におけるスピリチュアリティ]

「スピリチュアリティ（spirituality）」とは 、霊性とも訳される言葉であるが、近年ではスピリチュアリティというふうにカタカナのまま使われることが多い。霊性というと宗教との関わりが強く出てきてしまうが、キリスト教、仏教、イスラーム等の歴史宗教では、教義の理性的理解や倫理道徳の遵守を強調する一方で、グノーシス、密教、スーフィー等、神や仏と直接的に出会う身体的感覚を重視する伝統がある。どのような宗教にも神秘主義（mysticism）という文脈においてもスピリチュアリティが捉えられるだろう。

今日の科学的水準では疑似科学としかいいようがない実験によって、霊魂や霊界の実在を証明しようとした近代の心霊主義（spiritualism）もまたスピリチュアリティの起源である。英国や日本では霊媒による心霊との交流が試みられたが（オッペンハイム, 1992）、そ

のような事例はブラジル（山田,2000）でも、中国でも観察された（志賀市子,2003)。近代の心霊主義が地域の民族宗教やシャーマニズムの伝統と親和性の高いことが知られている。

ところが、現在用いられているスピリチュアリティには、宗教以外の領域において人生観・生活様式といった個人的な精神性まで含めて用いられることが多い。医療・教育においてスピリチュアル・ケアに関心を持つ人は徐々に増えている。

終末期医療に携わる人達は、意識的に死を迎えざるを得ない患者さんや家族にとって何が生命や生活の質を高めることに繋がるのかを考えてきた。そこで重視されるのが傾聴であるという。傾聴とは、家族や友人、或いは専門的な訓練を受けたケアワーカーが問題の渦中にある人の言葉を受け取る作業である。死ぬということは自分という存在が肉体・精神性含めて消えることへの恐怖や痛みを伴う。そのような当事者を見守る家族・親族や友人も喪失の痛みを味わう。生前には痛みを分かち合うものとして、死後は喪を共にする同伴者としてそばにいることを知らせる行為が傾聴であろう。傾聴には強く、しかし、柔軟な精神性を要求されるはずである。生死に関わる話を聞き続けることで受ける心理的なストレスを和らげるだけでも大変なことだ。伝統宗教に近い立場でキリスト教や仏教教団が関わる病院において先端的な終末期医療が試みられているのは当然とも言える。

死の重みをふまえたいのちの大切さと人間の絆を伝える教育にもスピリチュアルな要素が関わってくる。一例として『心のノート』がある。これは 2002 年に文部科学省が無料配布した小中学校の道徳の副教材であり、文化庁長官でもあった臨床心理学者の河合隼雄が政策に関わった。中学生用のノートには、先哲や文筆家の警句とともに日常生活の規律や心の持ちようを書くことで整理させる工夫がなされている。少年少女が成長していく過程において身につけてほしい自我の発達は、「ときどきわからなくなるけど、素直に見つめたい自分のこころ」と記述され、他者との関わりは、「ひとりぼっちじゃないと教えてくれたのはあなたの瞳の中の私だった」、自然や文化への愛着は、「この地球に生きとし生けるもの、かけがえのないこの瞬間を精一杯生き抜こう」、労働意欲は「この地球をともに生きる、この時間をいっそう輝かせる、そんな一人の担い手として」となる。中学校だより等にはありがちな文言だが、自分の心のありように重点が置かれ、そこから放射状に広がっていく関係性の先には、具体的な友人や親、先生、近所のおじさん・おばさんよりも、他者としての「あなた」であったり、現実社会や国土というよりも「地球」であったりする。このような感覚は、宗教伝統をふまえた「聖なるもの」にやや距離を置きつつも、「かけがえのないもの」という感性にうったえる今はやりのスピリチュアリティに近い。

[大衆文化のスピリチュアリティ]

世俗化されたスピリチュアルな要素は、現代の J ポップスに散りばめられている。一つだけ例を挙げれば、SMAP の「世界に一つだけの花」（作詞・作曲・編曲は槇原敬之、ビクターエンターティメント、2003 年）であろう。

「そうさ　僕らは　世界に一つだけの花　一人一人違う種を持つ　その花を咲かせることだけに　一生懸命になればいい」

「小さい花や　大きな花　一つとして　同じものはないから　No.1 にならなくても　いい　もともと特別な　Only one」

小学校や中学校で歌われたであろうこの歌詞は校歌にしてもいいくらいで、子供達一人一人の個性を開花させるという教育的な理念すら感じられる。教育には、元来、どの子にも教室内の居場所を確保してあげ、その子なりの能力を少しずつ伸ばすことを支援する仕組みと、同じ事を同時に複数で学習、練習させ、切磋琢磨により能力を高めていこうという仕掛けもある。前者に特化したものが養護教育等の特別教育か、少人数制のチューター教育であるが、ほとんどの子供達は後者の普通学級において試験や部活動などで知能と身体を鍛えることになる。経験上、多くの子供達にとって試験と試合がなければ、学習やスポーツに強い動機付けとなることが分かっている。しかし、仕掛け部分の選抜的機能のみが過度に強調され、勝ち負けだけで勉強や運動がなされていくと、トーナメント方式の学歴社会やチャンピオンシップのスポーツでは早々に意欲を削がれるものが多数出現してしまう。そこで、ゲームの過熱ぶりにクールダウンさせることが必要となり、とりあえず参加することの意義が強調されることになる。しかし、勝利の栄光をめざして頑張るという雰囲気がゲーム参加者の水準を底上げすることになることは事実であり、高水準で争っているものほど勝者への賞賛を惜しまない。才能と努力の差異がよく分かるからだ。

ところが、トップでなくともいい、元々特別なオンリーワンだといういい方は、現在、クールダウンの役割を超えて競い合うこと自体の無意味さという含意で使われることがある。ノーベル化学賞を受賞された野依良治氏が説くオンリーワンは独創性の意であり、人が切り開いた分野で既に分かっている問題を上手に解くことを競い合うところにノーベル賞的な研究の萌芽はないという話である。オンリーワンをめざせというのは、そのままでもよいとか、どんなレベルの達成であっても貴重であるといったことではない。現時点の人の評価など意に介さず、自分の道に確信をもって努力を惜しむなというメッセージであり、実に厳しい言葉なのである。このような人達の厚い層の上に突出した人物を得ることで科学技術が進展していく。だから、社会の活力が競い合いによって支えられているのと同様に、学問の進展に競い合いは欠かせないものなのだ。

それにもかかわらず、SMAP の歌の含意の方が、野依教授のメッセージ以上に日本の若者世代に浸透していると思われる。あまりに加熱した競争社会に疲れた人達、参加するのに躊躇する人達への癒しのメッセージとなるからである。1990 年代後半から日本の企業社会は人件費を抑えるための様々な施策を行い、削減された正規労働者は長時間労働に喘ぎ、非正規労働に最初から従事せざるを得ない若者世代にはホームレス寸前の不安定な生活を強いられているものが少なくない。これ以上、競い合うと身体・精神共に壊れてしまうという一般の不安を救っているのが、個々人はそのままでいいのだというメッセージである。

しかしながら、この歌詞を支えている個人のかけがえのなさは感性のレベルに留まっているという意味でスピリチュアルである。つまり、人権としてのかけがえのなさというよりは、高度消費社会における消費者としての権利としての力しかない。簡単に言えば、お

金のあるうちはどんな人でもお客様であり、誰に対してでも自立した人間としてふるまえるのだが、いったん、お金が無くなってしまえば、自尊心をもって最低限の文化的生活を営むことすらできなくなる個人になってしまう世の中である。大人はそこのところを肌で知っているが、既に消費物資に囲まれて生まれてきた若者世代には、オンリーワンとして大事に扱ってくれる家族や学校で育ってきたために、現代社会に適応しきれないものが少なくない。オウム世代のスピリチュアリティ探求というのは、自らは何も生産することなく、かけがえのない自分でいられるための生活基盤を人に依存しながら、自己探求に耽溺するナルシスティックなサブカルチャーであった。

[現代のスピリチュアリティ研究]

現代においては、宗教・教育・医療といった専門領域を初めとして、大衆文化の領域においてもスピリチュアルな要素が入り込んできている。価値観のみならず、健康や幸福感といった日常生活においても、自然であること、スローであることといった抽象度の高い文化的表現が用いられる時代である。それをスピリチュアルなものといいきってよいのかどうか、宗教研究者の中には、この概念が世俗的にも宗教的にも拡大しすぎることを訝しく思っているものも少なくない。筆者もその一人である。しかし、他方でこの概念が神秘主義や心霊主義という宗教伝統に連なることは認めながらも、世俗化された現代社会では、宗教に代わってスピリチュアリティの概念をもって広く文化の動向を見ていくことの有効性を主張する研究者もいる（樫尾直樹,2002、樫尾直樹・弓山達也・伊藤雅之,2004、島薗進,2007 等）。

樫尾によれば、「自分の中や自分と他者との間で働いていると感じられる、自分が自分を超えた何ものかとつながっている感覚（の質）」（樫尾直樹・弓山達也・伊藤雅之,2004:1）がスピリチュアリティであり、このような感覚への感性が、衣食住、労働、文化領域に浸透していることを重視する。伊藤は、スピリチュアリティを①当事者の体験重視、②不可視な存在との神秘的つながり、③気づきによる成長を含む事柄と定義している（伊藤雅之, 2005:43）。対抗文化(カウンター・カルチャー)や精神世界/ニューエイジといった大型書店の一角を占めるサブカルチャーがメインカルチャーに浸透しつつあるために、生老病死に関わる現代人の感覚にはスピリチュアルな要素がごく自然に現れてくるのだという。

新井満が英語詩からアイディアをえて訳詞・作曲をして秋川雅史の歌でヒットした「千の風になって」（新井, 2003）には、死後、自分は墓にはいないこと、「千の風になって　あの大きな空を　吹きわたっています」「秋には光になって　畑にふりそそぐ　冬はダイヤのように　きらめく雪になる　朝は鳥になって　あなたを目覚めさせる　夜は星になってあなたを見守る」とある。この歌詞は日本人を大いに感動させた。諦念を強調する仏教的な諸行無常観とは明らかに異なる、つながりの感覚とつながることで生きる活力を得られることの喜びをうたいあげたものであり、現代的なスピリチュアリティそのものといえる。

島薗進は、『スピリチュアリティの興隆―新霊性文化とその周辺』において、スピリチュアリティの隆盛を現代宗教の中にどのように位置づけるのか、スピリチュアルなものを求

めて生きる人達の思い、グノーシス主義からスピリチュアリティの現在を見直すという 3 つの大きな問題領域を論じている（島薗,2007)。以下では、現代宗教の最も優れた研究者の一人である島薗の論考からスピリチュアリティ研究の課題を考えてみたい。

島薗も樫尾や伊藤同様に、スピリチュアリティの文化表象が現代社会に浸透しつつあることを述べる。しかし、島薗がスピリチュアリティ文化の先駆者・現在の担い手としてあげた山尾三省（精神世界、自然農業家)、船井幸雄（経営コンサルタントで船井オープンワールド主催)、柏木哲夫（ホスピス事業）田中美津（ウーマン・リブ運動後に鍼灸師)、或いは本田哲郎（神父、釜ヶ崎等寄せ場労働者の支援活動）等、それぞれ生き方としてはかなり違うように思われる。特に、船井幸雄の船井オープンワールドに至っては、船井のいいもの、ほんものを世に出したいという意図はどうであれ、実際に出店している事業者には法律で認められていない医業類似行為（波動療法、いやしの地等）やマルチ商法的ビジネス従事者が少なくない。斉藤貴男の『カルト資本主義』扱いが相当ではないかと考える(斉藤，2000)。

こうした著名人以外にも、島薗は「現代日本人の生き方調査」（上廣倫理財団助成）を実施するなかで一般市民の「心の習慣」を丹念に追いながら、個人の「聖化」としてのスピリチュアリティをも論じている。個人の自己実現や、個人が他者・世界・自然との絆を求める側面が、抑制的な表現を用いながらもスピリチュアルな次元とふれあうものとして捉えられている。しかし、新霊性文化の専門家によるスピリチュアリティの扱い方と一般の人達が求めるスピリチュアリティとの差異については明らかではないし、日常生活においてスピリチュアリティを求める人達と求めない人達の差異がなぜ生まれるのかといったことの説明もない。

次に、スピリチュアリティ志向という現象を生み出す社会背景に関する議論である。家族・親族の絆をはじめ、地域、学校、職場といった個人の生活やアイデンティティの基礎となる中間社会が脆弱になり、国家の社会政策や市場経済、メディア社会に個人が直接対峙しているのが現在である。何度も言うが、かけがえのない自分や一度きりの人生、大事な人との関係がスピリチュアルに語られる一方で、格差社会は自分の面倒を自分で見られない人を容赦なく切り捨てていく。個人の尊厳が社会権として十分補償されない社会において、スピリチュアリティがもてはやされるというのは、結局の所、新自由主義経済・国家体制に即応した文化形態でしかない。この点は島薗も十分注意しているのだが（島薗，2007:297-298)、スピリチュアリティが公共的な問題となる局面に分析を集中している。確かに、個人の生/死の感覚や認識を無視して教育・医療・福祉等が成立し得なくなっていることは事実であるが、世俗的な意味での幸福感とスピリチュアルな次元における生の実感がどの程度重なったり、反発したりしているのか。中間層以上のスピリチュアリティ・ブーム（新霊性文化）と中下層が巻き込まれるスピリチュアリティ・ブーム（自己責任で自分の運気を高めたり、問題解決を図ったりすること）との間には差異があるようにも思える。成熟社会において生の実感をさらに追求する層と幸福感を得られないためにあえて生

の実感を別の次元に探し求める社会層との間には格差があるのではないか。宗教と社会階層の関連という観点から、現代のスピリチュアリティ・ブームについて考察を進めてみるのが本稿の目的である。

2　スピリチュアリティ・ブームと下流化

[スピリチュアリティ・ブームへの警鐘]

昨年から今年にかけて、「スピリチュアリティ」に関わる議論が珍しいほど登場した。堀江宗正「メディアのなかの『スピリチュアリティ』(『世界』2006/12)、玄侑宗久「個性を強要される現代人を引き込む『蜜』」、鏡リュウジ「正統派オカルトに課せられたアンチとしての使命」、弓山達也「オウム事件の風化で再び花開く癒しの市場」、河合香織「相談相手は、友人より霊がいい」(『中央公論』2006/12「特集スピリチュアルって何?」)。研究者やルポライター、スピリチュアリティの実践家の論考から、スピリチュアリティ・ブームが様々なメディアにより若者を引きよせている実態を報告すると共に、マスメディアに登場しつつあるスピリチュアリティに潜む危うさを警告した。

総合雑誌としては、視聴率獲得に欠かせない細木数子の占いエンターティメント番組や、江原啓之のスピリチュアルないやし番組「オーラの泉」を頂点とする、雑誌・インターネット、地域のイベントに隆盛するスピリチュアリティ・ブームに懸念を表明しようというわけである。おそらく、この種の雑誌の購読者層に彼等のファンやスピリチュアリティ・マニアは少ないだろうから、対話は成立しない。上記の番組制作者や出版編集者は読むかもしれないが、売れ筋を確保する魅力に抗しがたいだろう。問題は、マスメディアが公器であり、放送による社会的影響力に責任を持つという自覚が欠けていることである。

2007 年 3 月 1 日、全国霊感商法被害対策弁護士連絡会は、民放連やテレビ局各社に対して、オカルト番組の検討を申し入れた。その理由として、統一教会員が運営するビデオセンター（手相や姓名判断により一般市民を街角や駅前で勧誘し、霊界や因縁話により信者に取り込んでいく）において「オーラの泉」が使用されていたことをあげている。霊界や因縁の有無等は科学的に立証できるものではないし、宗教的な価値を含むものであるのに、その旨の断り等があるわけではない。制作側は、番組内容を本気で受け取る視聴者やそのような話題に関心を持つ人達を作り出している事実に無頓着であってよいわけがない。

中央公論は、さらに 2007/2 月号において拙論「『現代社会と宗教』を見渡す 30 冊」、3 月号で「宗教的生活のすすめ」という特集を組んだ。「お手軽な『答え』が蔓延する現代―。自分なりのやり方でいい、先人達が育んできた精神に触れてみよう。もっと豊饒な世界に気付くはずだ」といい、玄侑宗久・岸本葉子の対談「不思議を不思議のままにする強さを持とう」を配し、仏教の立場で松原哲明、カソリックでは曾野綾子、神道から田中恆清に所説を述べてもらい、五木寛之「私が他力を感じるとき」と宗教学者の山折哲雄「重しを喪失した日本、今こそ先人の知恵に跪こう」で始めと終わりをしめている。

ここでは、先の特集以上にスピリチュアリティ・ブームに懐疑的な姿勢を宗教の側から

提示している。現代日本には宗教伝統をスピリチュアリティにより代替しようという動きが見られるが、それでよいのかというわけである。個人を超えた力を感じるといっても、それを感じる個人の感性にスピリチュアリティが顕れるために、個人を取り巻く他者や自然・社会の存在が軽くなる。先の「千の風」の歌詞にあるように、喪失の痛みを感じるこころとそのこころに応えるスピリチュアルな存在が遍在するという感覚のみが歌われている。喪失を個としてストレートに受け止める孤独さと、共同体として喪失の回復をめざす家族や地域、伝統文化それ自体が喪失しつつあることをこの歌詞は象徴している。それでよいのですかということである。

[スピリチュアル番組と下流化]

ところで、同じ時期に、『論座』(2007/1 月号)は「現代の貧困」、『中央公論』(2007/2,5 月号)は、それぞれ「大学下流化時代」「下流の家族崩壊」を特集に組んでいる。

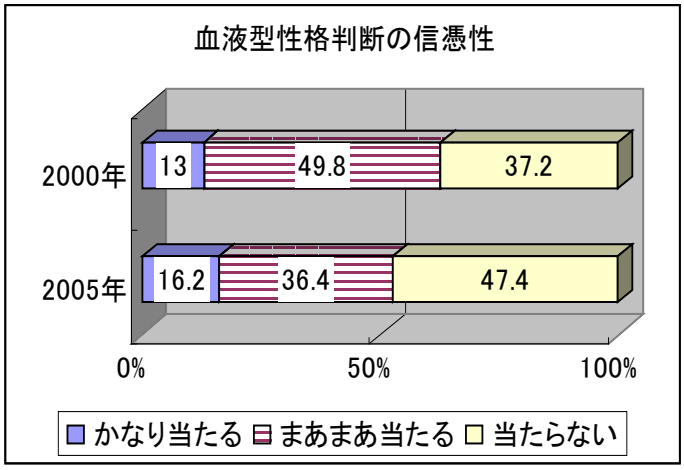
24 時間利用のインターネット・カフェを常宿とする日雇いの若者達、生活保護水準以下の収入しか得られない非正規労働者や零細経営者の増加(ワーキングプア)は、格差社会化を象徴する事例である。高齢化した寄せ場労働者と外国人労働者、中間層から転げ落ち始めた若者が日雇いの仕事を奪い合う風景など誰が予想できただろうか。しかし、製造業が海外移転し、サービス業が低賃金労働者を雇用する北米や西欧の一部の国では 20 年も前から進行している現象である。ここ 2,3 年の格差社会論ブームはいまさらの感が否めない。

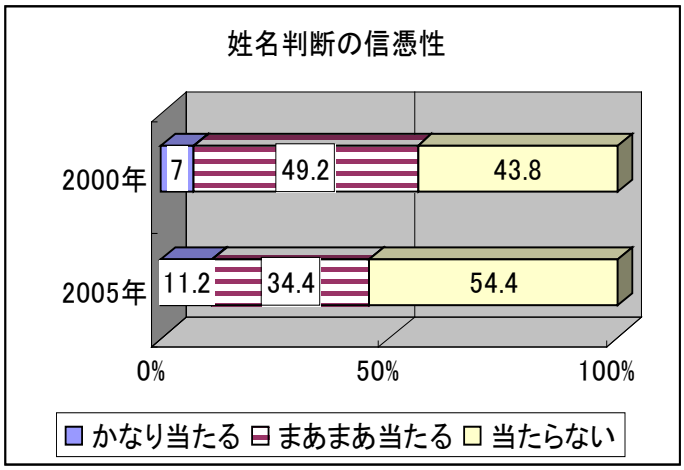
その格差問題を扱う視点だが、実質的な経済格差や教育格差に加えて、日本では文化論的な解釈が流行っている。下流化である。これは中流社会の文化が下層社会の文化に標準化されつつあるという指摘だ。大学の下流化とは、学生の学力の多様化(学力低下、高校の必修科目未履修)に応じて、大学が教養主義を棄てて実学一辺倒にはしるさまをいう。家族の下流化とは、将来の生活設計がたたない人達(伴侶獲得を諦める)や、現在の生活設計をたてられない人達(小さな財布なのに消費は抑制できない)、若年シングル・マザー(20 歳前後で結婚・子育てに堪えきれず、離婚するパターン)の増加だ。ついでにいうと、テレビ番組も下流化している感が否めない。タレント・芸人の方々が、占い、クイズ、食事、歓談に興じている番組が 19 時から 22 時まで続く。

現在、いわゆる夜のゴールデンタイムにおいてテレビを視聴している層は、世代としては子供・少年少女、中高年以降となる。大学生や 20,30 代の職業人はあまり見ないだろう。階層的に言えば、インターネット配信の番組やケーブルテレビ、衛星放送の多チャンネル化に対応しきれていない層が、お仕着せのテレビ番組を見ているといったところであろうか。スピリチュアルな番組もその一つである。いわゆるサブカルチャーがメインカルチャーになりつつあるからゴールデンタイムに登場したという評価も可能なのだが、筆者は一般大衆の娯楽番組がサブカルチャーに下降移動しているのではないかという気がする。テレビ番組に対するリテラシーもあり、メディアの選択可能な層は早々にサブカルチャー化したテレビに見切りを付けているだろう。しかし、他に選択肢のない層や子供達は時間つぶしであれ、ながら視聴であれ、見慣れていくのである。

[若者とスピリチュアリティ]

「宗教と社会」学会が 2000 年と 2005 年に実施した「宗教意識調査プロジェクト」（日本の大学生 5,000 名弱を対象に授業時間中に調査）によると、占い（血液型性格判断・姓名判断）に関する信憑性において興味深い結果が出ている。およそ日本人の 4 割が A 型の血液と言われているが、5,000 万弱の人々が同じような性格を持っているなどと考えるだけでも笑止であるし、同姓同名はもとより同じ画数の姓名であれば同じ運勢を持つなどというのも与太話の類である。それを学問のいろはくらいは習っているはずの大学生において、半数以上が信憑性有りと答えているのは大学人としていたく恥じ入るところである。どちらもバーナム効果（誰にでも当てはまるような曖昧で一般的な特徴をあらわす記述を、自分だけに当てはまる正確なものだと捉えてしまう心理）を持ち出すまでもない思いこみの典型例である。





さらに興味深いことは、信憑性構造の変化である。上図を見てみると、血液型性格判断・姓名判断共に、2000 年よりも 2005 年の方が当たるというものの総数は 10%ほど低下しているが、かなり当たると回答したものが相対的に増えている。血液型性格判断では、当た

ると回答したものの内で 20.7%から 28.6%に、姓名判断でも同様に 12.5%から 24.6%と倍増している。パネル調査ではないし、ランダムサンプリングも行っていないので統計的に有意味な差とは言えないがなぜ、かなり当たると思いこむ学生が増えたのだろうか。

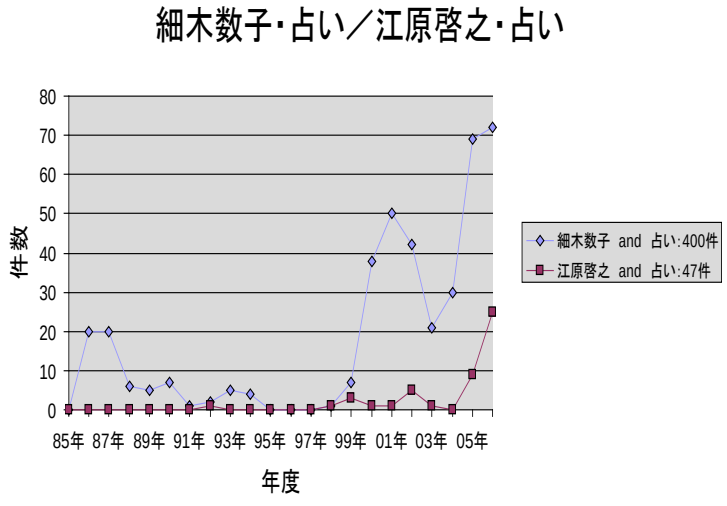
一つの可能性として、彼等が中高生の時代に見ていたテレビ番組や雑誌の影響が考えられる。テレビ番組を選択視聴できないのがこの時期の子供である。理由は多チャンネル化していたとしても、或いは親がそのような番組を嫌っていたとしても、学校では多数派の話題についていくことがいじめを受けない仲間づきあいの基本だからである。

スピリチュアリティ番組にひっぱりだこの細木数子や江原啓之がいつ頃からマスメディアに登場してきたのだろうか。メディアにおけるスピリチュアリティ・ブームを次に検討しよう。

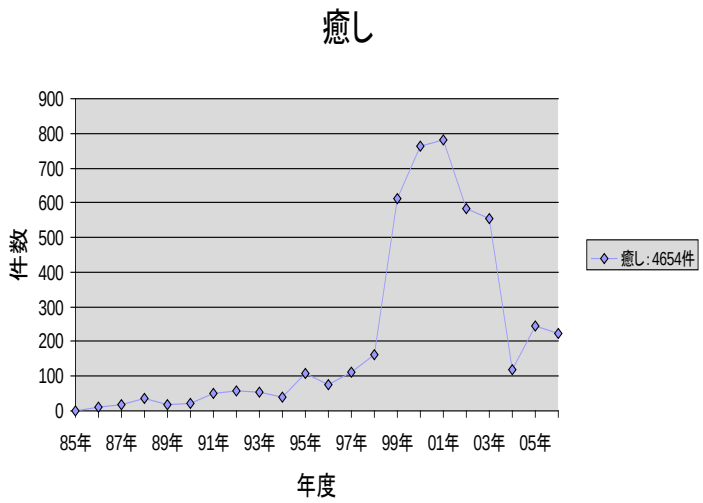
[スピリチュアリティ・ブームの仕掛け]

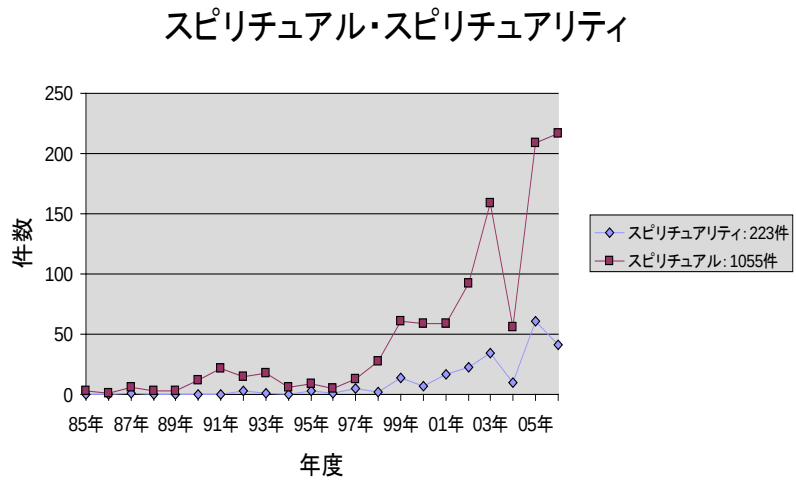
宗教情報リサーチセンターにある宗教情報データベース(1980 年代中後半から現在まで、全国紙・地方紙・宗教系新聞 40 数誌、主要な月刊誌・週刊誌における宗教記事をデータベース化したもの）を利用して、スピリチュアリティ・ブームを探ってみる。細木数子が週刊誌に初めて登場したのは島倉千代子の債務返済に介入して興業プロダクションを初めた 1970 年代後半であり、1980 年代初めに六星占術の本を出しブームとなり、政財界にパイプを持つ陽明学者安岡正篤との婚姻をめぐって安岡家と裁判で争うなど週刊誌に再度登場する。1990 年代は殆どメディアに登場していないが、2000 年代に入り関西のテレビ番組からキー局中心のレギュラー番組数本を持つ等のブレイクぶりである。占いの当否よりも、強烈な個性や保守的な道徳観による説教がエンターティメントになっている。

これに対して、江原啓之はスピリチュアル占い・カウンセリングといった単行本の刊行、カウンセリングを含めたイベントによってエハラーと呼ばれるファンを獲得してきた霊術家である。テレビでは「オーラの泉」に先立ち、様々な霊視番組にも登場する。霊視や守護霊への言及を除けば、江原の言葉に細木ほどの毒はなく、読者や視聴者をふんわりと包み込む。近年では霊場周遊や識者との対談等もこなし、それなりの存在感をアピールして



彼等のメディアへの登場は、大きく見れば、社会全体の癒しブームに乗ったものである。下図を参照してみれば、癒しブームとスピリチュアリティ・ブームが同じものであることが了解できるだろう。それぞれ、宗教情報データベースを用いて、「癒し」「スピリチュアリティ、スピリチュアル」といった単語が使われる記事を検索したものである。





スピリチュアリティというカタカナ語よりも、癒し（いやし）という日本語の方がはるかに使用されていることにも注意してもらいたい。1980 年代の癒しは文字通り、病を癒すことか、心を癒すというキリスト教的な使用法が一般的だった。1995 年のオウム事件の際には、被害者の心の傷は癒えないという使われ方だった。ところが、1990 年代後半になると上田紀行の『癒しの時代をひらく』（1997）に象徴されるように、ヒーリングに相当する癒しが主要な意味となり、2000 年代には様々な癒し系グッズが販売されることになる。

これとは対照的に、スピリチュアリティという言葉は、初めから特殊な言葉であり、一

部の宗教学者を除けば、1980 年代における精神世界、ニューエイジ等のオカルト・ブームで最も使用されている。学問領域やサブカルチャーで使用されていた言葉の外延を拡大して、現代人の心性を象徴する概念としてリメイクしたのが、先に挙げたような「宗教と社会」学会で活躍する若手の研究者達である。江原のスピリチュアル・カウンセリングも霊術系から心理療法にも近いヒーリングとして受容されてきたのが 1990 年代後半以降であった。仕掛けるものは時代の潮目を見ているのであろうから、仕掛けが時流を作ったのか、時流を掴むものが仕掛け人になったのかは分からない。ともあれ、1990 年代後半から 2000 年代に日本は時代の転換期を迎えたことは確かである。

スピリチュアリティ・ブームといい、癒しの時代といい、アメリカのセラピー社会を 10 数年遅れで後追いしているように見える。グローバル化する社会において、個人を支えてきた社会の共同性が失われ、むき出しとなった個人が市場経済や格差社会と対峙せざるを得なくなった。自己決定自己責任の論理（新自由主義の社会）を倫理化したものがセラピー（個人の責任として引き受け、個人で癒す）であり、それが文化となり、保健医療にも制度化されたものがセラピー社会である。社会的矛盾や問題から生じる様々な葛藤や軋轢によるストレスを自身のこころで受け止め、自ら癒しを求めるような人間を作り上げ、けして社会全体のシステムが問題とは考えさせない文化の中で、スピリチュアリティ・ブームは生まれてきたのではないだろうか。

３　「すぴこん」にみるスピリチュアリティ

[すぴこんとは何か]

「すぴこん」とは、スピリチュアル・コンベンションの略称で、スピリチュアルなグッズ・各種セラピーの見本市である。IT 関連企業を経営していた小泉義仁（42 歳）が「テディ・エンジェルのスピリチュアルリンク」を立ち上げ、次いで見本市の企画を 2002 年から進めた。現在、全国の主要都市で見本市が開催され、ちなみに東京では隔月、札幌でも 2006 年に 3 回、函館・帯広各 1 回の開催である。運営は各地でボランティアが主催団体となり、公共施設やコンベンションセンターの会議室を借りて、数十のブースを設える。一人 1800 円の入場料と出店者のブース使用料が主催団体の収益になり、そこから会場使用料と小泉にロイヤリティを支払う。いわゆるフランチャイズ方式である。札幌会場では 1 日に 300~400 の入場者がいたので、入場料収入だけでも 1 日 60 万円前後になり、2 日やれば 100 万円にはなろう。出店料を 1 日 1 万としても 50 店舗の参加があれば 2 日で 100 万円である。会議室使用料は展示会の場合割高であるが 1 日 40 万円程度として 2 日で 80 万円。ロイヤリティが数万か数十万かは不明であるが、宣伝はホームページと口コミだけであるから、ポスター制作費等の諸経費を入れても、十分黒字になるというのは頷ける話である。

[スピリチュアリティの市場]

下表は札幌開催のすぴこんで調査した出店の傾向である。少し説明しておこう。

①物販は漢方・ダイエット含む健康食品・器具、パワーストーンや開運グッズの販売であ

る。治療系列では、霊気（臼井甕男により大正期に普及された手当て療法）・レイキ（海外に伝播され逆輸入されたタッチ・ヒーリング）、波動（食物・物品の波動と体内の波動を調和させる）があった。波動転写装置なるものが 15 万円前後で販売されている。メカニズムは理解不能であるが、まず、自分の手をその装置の上に置いて波動を記憶させた後に、これを飲料水に転写すれば、健康水になり、ネックレスに転写すれば血行促進になるといった具合である。代替療法（リンパ療法、ホメオパシー等）の物販から、リフレクソロジー等のマッサージといったいわゆる医業類似行為に相当するものもある。

②セラピー・ヒーリングは、オーラ・チャクラ撮影による健康・運勢診断、霊感・カード占い、チャネリング（宇宙人、前世のメッセージを伝える）、スピリチュアル・カウンセリング等である。筆者も 1000 円でお試しコースのオーラ写真を撮影し、健康・運勢とも良好との診断を得たが、サービスでチャクラ（エネルギー、気の集まるところとされる）を見てもらうと腹部に問題があるという。さらに、3000 円で診断を受けるよう勧められたが、ご遠慮申しあげた。オーラ写真のブースが大人気であったが、この写真撮影装置とパソコンのソフトはいくらするのかと尋ねたところ、100 万円近くするという話である。十分元は取れるだろう。霊感占いの後にスピリチュアルなカウンセリングを受ける若い女性の姿も目につき、真剣に話し込んでいた。相談料は無料から 20 分 3,000 円まで差がある。

③ヒーラー、霊能者による講演が複数の会場で組まれ、参加者はお気に入りの講演（天使、ガイア、宇宙等の話、ピラミッド・パワーの実演等）を熱心に聴く。その中の一つに、佐藤まさ子というヒーラーの講演会があった。人差し指と親指で作った三角形のピラミッドを頭上で作ると、そのピラミッドを通して宇宙のエネルギーが頭頂部のチャクラに入り、これで心身の健康が維持されるという。この実習に、5,60 名の札幌市民が参加している光景に筆者は驚いてしまった。また、中森じゅあんというこの分野では相当な有名人らしい占いの方の講演があったが、彼女は天使をいたるところに見ることができるといった話を 1 時間あまり行った。中高年のファンとおぼし的女性が目立つ。

札幌すぴこんの出店　分類

物販	34	ヒーリング	7
マッサージ	9	オーラ写真	5
コーチング	3	カウンセリング	5
チャネリング	2	霊気・レイキ	1
リーディング	5	エンジェル	1
セラピー	3	守護霊	2
波動	1	人生相談	3

霊視	1	各種診断	3
書道	1	宣伝	3
占い	4	チャクラ	1

参加者の大半は 20 代から 50 代にかけての女性だが、出店業者とその予備軍になりそうなマニアは男性が多い。各ブースで占い、診断・相談、ヒーリングを受けると、何も買わずとも半日で 1 万がすぐなくなる。彼等は特定宗教の信者ではない。人生、自然環境、平和を真剣に考え、慢性病に難儀し、「本当の自分」を探しあてたい、元気を得たいと来場する人達である。なぜ、公的相談機関や市民講座、医療専門機関ではなく、スピリチュアルな領域に救いを求めてやってくるのだろうか。

[すぴこんブームの解釈]

新聞等で書かれたり、学会等で論じられた事柄をもとに研究者・ジャーナリストによるすぴこんの分析を筆者なりにまとめてみよう。

①現代は、宗教の胡散臭さや拘束力を嫌う一方で、「魂の成長・癒し」を神秘的な力・つながり・体験に求める人達が増えている。すぴこんはそうしたニーズに応えて、スピリチュアルな想念・技法・物品を小分けにパッケージし、お手頃価格で販売する。主催者側（小泉及び各地の代表者）は、質の悪いスピリチュアルな商品はお客さんに見切られて淘汰されるという。このシステムは理に適っているといい、その点を評価する人もいる。スピリチュアリティが市場原理に親和的であることが分かる。しかし、スピリチュアリティを求める人達に消費者として十分な選択眼が備わっているとは言い難い。業界団体による自主規制もない。世にいう悪徳商法を規制するのはマーケットの力ではなく法律だということを確認しておきたい。

②「自分が変われば世界が変わる」とすぴこん関係者は考える。積極思考とスピリチュアル・グッズのサプリメントをとることで、ストレスの多い競争社会に適合できると。癒しを求める現代人の不安が見え隠れする。ここには、アメリカのセラピー文化から流れ込んだポジティブ・シンキングが埋め込まれている。確かに気は持ちようなのだが、気持ちの切り替えといった常識的な発想を超えて、自己の思念や身体の変化が世界を変えるという楽観的な神秘主義に陥り、自己と世界を仲介する社会関係や集団・組織の動きに無関心な人達も相当いると考えられている。複雑化した社会への退行的精神状況であろうか。

③「本当の自分」探しが青年のみならず、壮年世代にまで及んできたのは、社会が青年期の若さを保っているからか。或いは、成熟しきれない人達が増えているのか。スピリチュアルな占いやカウンセリングによって、「あなたはこういう人だ」「こんな運勢なんだよ」と言ってもらいたい。今の自分は仮の姿。「本当の私」に出会い、スピリチュアルな人に背中を押してもらう。おそらく、このような人たちは自分探しの無限のループにはまる。つまり、A のヒーラーには A'という私を確認してもらい、B のカウンセラーには B'の私を再発見してもらう。N 番目のスピリチュアル・カウンセリングにおいて、N'という前世があ

ったと託宣を受けることで満足できるのかという問題である。
④自己決定自己責任の論理では、生きづらさは自分の行為が導いたものであるし、当然、自分が負わなければならないものである。しかし、それに堪えきれないのですぴこんをのぞいてみるわけだ。自分の生きづらさを守護霊や過去生との関係で解釈してもらう人達は一応の安堵を得る。辛いのは自分のせいではない。自分の力の及ばないところに原因があった。この種の託宣は、精神分析やポップ心理学のカウンセリングと機能的に等価であり、とりあえず、当面の抑圧的心理状況を和らげてくれる。スピリチュアルな物語によって自分がひとりぼっちではなく、なにものか自分を超えるものに繋がっているという安心感が得られるわけである。しかし、スピリチュアルな物語を方便として受けとめられない人が多いために、その先も何か自分の状況を変えるために特別な対処が必要ではないかと不安に駆られる。そして、スピリチュアル市場において商品を自己責任で選択することを再度迫られ、その結果は再び自己責任で負うことが求められるのである。

およそ、以上のようなことが既に論じられているのだが、筆者はさらに 2 点ほど論点を付け加えておきたい。
①すぴこんにはファンがマニアになり、自ら出店をめざす業者となるプロセスがある。すぴこん会場はスピリチュアルなグッズの実演販売をなす人達の顔見世興行であり、本格的な相談や施術・講習を希望する人達には店舗に来るようにアドバイスがなされ、コースをもれなく受ければ多額の費用がかかる。学生や若い勤め人、主婦にとっては相当の出費である。しかし、クライアントとして通っているうちに自分同様の関心を持つ人が少なくないことも知る。しかも、この種のセミナーには事業者養成コースを併設しているのである。業者は顧客への直接販売、ネットワーク作りを通した新規の顧客開拓と新規参入者の教育により経営をなしている。この仕組みを理解し、才覚のあるもの、二匹目のドジョウをねらうものが新規参入を考える。その結果、いとも簡単に、医療・カウンセリング・教育等の極めて高度な専門性と資格を要する領域に素人が参入するのである。不測の事態に誰がどのように責任を取るのか。主催者は全て自己責任という。自己の選択に責任を取りきれる人達はすぴこんに行かないと思うのであるがどうであろうか。
②「本当の自分探し」と下流化の関係を指摘したのが、三浦展『下流社会 新たな階層集団の出現』（光文社、2005）や、内田樹『下流志向──学ばない子どもたち、働かない若者たち』（講談社、2007）である。三浦は、1990 年代のバブル景気を引きずった自分探し世代が社会の下流に沈滞する可能性は大といっている。その原因は、内田によると、教育・キャリア形成の根底的価値観の崩壊にある。つまり、やりたいことだけやりたい子供と、子供がやりたいようにやらせたい親は、教育を消費の対象とみなすようになった。教育サービスを購入する時に効用を得られなければ（面白くない、何のためになるか分からないと）、やらない。ところが、学習の常として、学び始める前に学問の価値や知的好奇心を満足させる喜びは分からないのである。だから忍耐をもって、分かるまでひたすらまねる（暗記）ことも必要である。キャリア形成にも似た側面がある。最初からやりがいのある、トータ

ルな仕事を任せられるはずがない。自分が生かせないというほどに、能力をもてあましている若者はそういないだろう。学習や仕事に面白さややりがいを直結させた価値観、やるに価することのみやるという態度では、まともな勉強や仕事ができないということだ。

要するに、自分探しをして、生活基盤を安定させる仕事を得られないままに中高年期に入る可能性をもつ下層社会予備軍が、若者や中流社会の中に現れてきている。事実、すぴこんの来場者は必ずしも有閑マダムではないし、可処分所得の多い OL でもない。すきま産業とみなせなくもない出店者とて、大半は事業として成功しない零細経営者である。

すぴこんのスピリチュアルな出店者の展示やそれに集まる人達の楽しげな表情の見ている限りでは、大衆文化におけるスピリチュアリティの隆盛とそれが市場化されて洗練される可能性なども頭によぎるかもしれない。しかし、出店者の経営や顧客達の生活、将来展望などを一歩踏み込んで考えてみると、かなり寒々しい風景がそこにあると言えないだろうか。

４　スピリチュアリティ・ブームの危うさ

[自己実現の内省化とスピリチュアルな個人主義へ]

元来、若い世代の歌は、恋愛における失恋や立ち直りを通して不安定な自我を確立していく物語であることが多い。相手と出会うことで自分が変わったり、相手のために夢を諦めて家庭を築いたりと、関係や社会の中で自己を確認することが普通だった。しかし、最近の若者の歌を聴くと、恋愛で相手から承認されることで幸せになれるといった他者への信頼はあまり感じられない。恋愛や仕事、いろいろなことがプロセスとして意識され、プロセスを経る自分こそ歌詞の中心になっているようなバラードが実に多い。本当の自分を探すプロセスにおいていろいろなことをやる。そして、最後に「自分らしさ」や自分が「かけがえのない存在」であることに気づいて、他者との関係や社会的な位置において自分を見るのをやめようといった歌詞が目につく。絢香の「I believe 」はその典型である。

「人に流されていた日々　そんな自分にさよなら　I believe myself 信じることですべてが始まる気がするの（作詞綾香、ワーナーミュージックジャパン、2006)」。

20 歳前後でこの達観ぶりはあっぱれであるが、その反面寂しい気持ちにもなる。人や世の中を信じて試すプロセスがもっともっとあってよいのではないかと。

NHK の世論調査によれば、1980 年代なかばに日本人の意識が「物質的な豊かさ」よりも「心の豊かさ」を求める方向に逆転したという。1980 年代中後半のバブル経済に至って、経済的繁栄は自明のものとなり、それ以上に豊かな消費、豊かな生きがいを共に求める人達が出現してきたのである。1985 年の男女雇用機会均等法施行以来、高等教育を終えた女性は職場進出を果たし、仕事を通して自己実現をなすことに男女の差異はなくなっていった。フリーターなる言葉がはやりだし、自分がしたいことをするために正規の職には就かない若者達がメディアに登場したのもこの頃である。1990 年代初頭のバブル景気が過ぎ去った後も、「自己実現」が若者達のキーワードである時代が続く。むしろ、経済が冷え切っ

たことで「自分探し」は内省の度合いを強め、スピリチュアルな志向に向かっていったように思われる。世間的に評価される社会的属性や地位（学歴、職種、所属集団、一芸に秀でる等）において自分を証明するのはますます難しくなっているからである。

既に述べたように、現代のスピリチュアリティ志向には、①自分を超えたものにつながっているという感覚やつながりたいという意識が顕著なこと、②人間が歴史的に作り上げてきた文化伝統や社会制度を飛び越して、自然、世界、地球・宇宙といった身近でありながらも抽象的な存在を対象にしていること、③そのような存在とつながる自己、自己のあり方に関心が集中しているという特徴があった。様々な社会問題を解決するにあたり既存の文化伝統や社会制度ではもはやどうすることもできないといった諦念が、超越的な存在や自己に関心を向けているのではないだろうか。

ところで、「ほんとうの自分」「ほんとうの出会い」を謳い文句に「自分探し」の青年達を集客していたビジネスに自己啓発セミナーがある。これらの会社は「自己実現」が多くの若者の関心事になる 1980 年代後半から流行して 1990 年代後半にはピークを過ぎた。世俗的な能力開花にもつながる自己啓発はバブル崩壊とともにブームを終え、現状をそのまま肯定する癒しブームに道を譲ったものと見える。むしろ、この時期に目立つのは、ライフ・スペースやホーム・オブ・ハートのような自己啓発セミナー団体のカルト化である。顧客を確保できない自己啓発セミナーが既に獲得した顧客とのパイプを教化するために、セミナーや団体生活で発見される自己や他者との関係それ自体をスピリチュアル化する戦略をとったと考えてもよいだろう。自己啓発セミナーには強引な勧誘行為や精神的外傷を与えかねない特異な集団心理療法が一般的に指摘され、死体を甦らせるといった常軌を逸した行為やセミナー受講者へ精神的肉体的な暴力行為もカルト化したセミナー団体の問題点として指摘されているところだが、自己の能力開発や他者との関係それ自体を商品化したセラピー社会のすきま産業である。しかし、バブル崩壊後、青年層に自分に投資する精神的・金銭的余力がなくなってきた。その結果、セミナー会社はさらに強引な勧誘ノルマをセミナーに組み込む手法を取らざるをえなくなったのである。

バブル崩壊後、日本の企業は労働市場と雇用形態のリストラクチュアリングで徹底した人的コストの削減を図った。2006 年時点で日本の雇用者のうち非正規雇用と正規雇用の割合はほぼ 1 対 2 であり、格差社会の時代が喧伝される。正規の職を得ているものでも、いつその地位からすべり落ちるか分からないわけで、現代の青年・壮年世代は、なにものにもなれない不安を抱えながら、「自己」を確立するために悪戦苦闘しているのである。

1990 年代後半より癒しやスピリチュアリティという言葉がはやり、様々な癒し系グッズが登場してきたのは、「自己実現」ゲームに疲れ果ててそのままの自分でも認めてほしいという願望に応えたものである。スピリチュアルなリーディングや占いは、自分の新しい可能性についてアドバイスや元気の源になることもあるだろうが、「自己実現」ゲームにおいて一回休み程度の効用しか得られないだろう。「自己実現」とは一生をかけてやるしかないものだし、霊視で分かった過去生が「サムライ」であろうと「中世のお姫様」であろうと、

そのようなエピソードを自己物語に付け足したところでストーリーのどんでん返しが起こるわけではない。気休めと割り切っているうちはすぴこんを楽しむ客なのだが、本気にし始めると特定のスピリチュアル・カウンセラーの顧客になるか、セミナーにでも参加しなくてはならないだろう。そこに待ちかまえているものはスピリチュアルに味付けされて商品化された「ほんとうの自分」である。すぴこんは自己啓発セミナーよりソフトであるが、中身はやはり「自己」と「他者との関係」を商品化していることに変わりはない。

[スピリチュアリティとは中抜きの思考？]

多くの普通の人々にとってアイデンティティの確立とは社会の座標軸に自分を位置づけることである。人間発達の諸段階において就学、就業、家族形成を順次行うことで自分と社会との関わりを確認する。家族、地域、学校、職場、社交の集まりといった身近な他者や集団こそが、その人の存在を社会的に証明してくれる。ところが、現代はこのような中間的な社会関係を取り結ぶことなく、個人が世界や地球環境と直接的に関わるような意識を持つ人も少なくない。昨今のロハス・ブーム等もその一つだろう。個人の生き方、ライフスタイルが地球や世界の持続可能性と直結しているという感覚である。それはその通りなのだが、その間に極めて複雑な生態系や農業、経済のシステムがあり、リサイクル一つとっても一個人の思いと全体のシステム的合理性は必ずしも一致しないことがある。中抜きの志向性は現代のあまりにも複雑化した社会に対する思考の簡略化（エコノミー）とみることもできる。また、社会学的発想によれば、現代は個人と外部世界を媒介する中間的な社会が脆弱化しているために、個人が直接、国家や自然と向き合わざるを得ず、ネット空間においてプチ・ナショナリズム的な言説に染まったり、地球環境に優しいかどうかに敏感になったりもすると解釈できよう。自己と包括的な全体社会である国家や自然が意識の対象となりやすいのも道理であり、この二つの抽象的な観念がスピリチュアルなものとして崇められても不思議ではない。ここに私達はすぴこんが示唆する現代人の精神状況をかいま見ることができよう。

問題はこのままでよいのかということである。聖化された自己、世界や自然といった抽象的な観念に対して堂々巡りの議論をやったり、感性を磨いたりすることだけで私達の社会が変わっていくだろうか。いや、自分自身を変えていくことができるのだろうか。あたりまえのことであるが、自分の眼で自分の顔を見ることはできない。誰かに見てもらって、あなたはこういう人であるとか、こうした方がいいとか言ってもらうことで、自分が世の中に具体的にどのように存在しているのかが分かるし、すべきことも見えてくることがある。自己意識は、自己の精神作用に対して鏡の役割を果たしてくれる身近な他者を必要とする。しかし、このような身近な他者との関係を持ち得ていない人や、スピリチュアルな専門家の言葉の方に信憑性があると思う人達が、すぴこんにおいて、「ほんとうの私」や「潜在能力をまだ発揮できていない原石としての私」を発見してもらうのである。しかし、その「私」とてスピリチュアリティの市場で展示即売されたものではないか。失礼を承知で言えば、20 年、30 年と生きてきて迷ったり、悩んだりしていることが、この程度のお慰み

で解決の一口を発見できるようであれば、ずいぶんと簡単な人生と言うこともできる。

スピリチュアリティ・ブームは、ポストモダンと一脈通じているところがあるにしても、その流れに絡めとらえられている人々の特徴は中抜きの思考にあるように思われる。人間というものを人と人との間に生きる存在という状況や関係抜きに個として捉え、個としての価値を重視する。従来の宗教文化や宗教倫理が説いてきた人間とは関係性の規範や道徳の中でよく生きる人々であったが、連帯的な社会モデルは脱構築されたかのようだ。また、スピリチュアルな見方をする人にとって、社会にしても、自然にしても眼前の目の前にある具体的な社会関係や集団、或いは日常見慣れた風景よりも、遠い彼方にある自然や地球・宇宙に価値をおく傾向がある。これも自然科学・社会科学的に練られた思考よりも、ブームや感性にうったえるマスメディアに慣れすぎた結果であるとも言える。

こうした状況を見るとき、宗教研究はスピリチュアリティ・ブームに対してもっともっと批判的な視点からの考察を加えなければいけないのではないだろうか。宗教からスピリチュアリティへの流れという宗教変動の捉え方は、世の流れに便乗する宗教研究者のブームではないのか。スピリチュアルな人々や社会現象、イベント等を列挙し、自身もスピリチュアリティに浸っているのが宗教研究者の仕事ではあるまい。このような思いから、すぴこんを事例として現代のスピリチュアリティ・ブームを批判的に検討する論考をまとめてみた。読者にとって少しでも現代社会の解読に資する視点を提供できたらと考えている。

文献

新井満,2003,『千の風になって』講談社。

ジャネット・オッペンハイム,1992, 和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭―ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』工作舎。Oppenheim, Janet, 1985, The Other World: Spiritualism and psychical research in England 1850-1914, Cambridge and New York: Cambridge University Press

山田政信,2000,カルデシズムー近代心霊主義の成立とブラジルにおける展開 『アメリカス研究』第 5 号 65 頁～88 頁。

伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編,2004,『スピリチュアリティの社会学－現代世界の宗教性の探求』、世界思想社。

伊藤雅之,2005,「スピリチュアリティ研究の射程と応用可能性」『社会科学基礎論研究』第 4 号、pp.40-56。

樫尾直樹編,2002,『スピリチュアリティを生きる－新しい絆を求めて』、せりか書房。

斉藤貴男,2000,『カルト資本主義』文藝春秋。

志賀市子,2003,『中国のこっくりさん―扶鸞信仰と華人社会』大修館書店。

文部科学省,2002,『心のノート　中学校』